

# 学としての GRAMMATICA

— ダキアのポエティウスによる様態論のプログラム —

関 沢 和 泉

## はじめに

13世紀の半ば過ぎから14世紀にかけて活動し、文法学を科学化しようとした一派の言語理論について、その導入となるような形で基礎的な構図について素描してみたい。彼らが用いていた概念装置から、今日、様態論学派 *modistae* と呼ばれているその一派は、文法学 *grammatica* を単なる実用文法、すなわち、どのように読み書き話すかを教える文法（教則）から、確実な原理から厳密に展開される言語理論へと、言語に関する学知へと転換しようと試みた。そうした文法学の学知化の源流には12世紀のベトルス・ヘリアス、*Glosule* などからの流れがあり、また13世紀半ばのロジャー・ベーコンによるいわゆる「思弁文法学」のプログラムがその直接的な背景をなしていると考えられている。

ここで取り上げたいのは、そうした要素を背景として様態論の概念が姿を見せはじめた13世紀半ばからしばらくが過ぎ、それまで雑多に出されてきた個々のアイデアが再検討され、ある一つの総体として、その後の理論的発展の基礎となるように再構成される場面である。今回取り上げるダキアのポエティウスのテキスト『表示諸様態について』<sup>1)</sup>は、1270年前後のものと考えられているが、この書は、その前半の3分の1近くを占めて展開される様態論が可能となる地平を探索する問いと共に、まさに、残りの13世紀と、14世紀初頭のその後の様態論学派の発展の基礎を描き出していたと考えられている論考である。

ここで急進的アリストテレス主義者として中世哲学史に名があげられているダキアのポエティウスの生涯について、残念ながらあまり多くを語ることはできない。現在確実であると言われるのは、出身地が現在のデンマークであり<sup>2)</sup>、1270年代前後にパリの学芸学部で中心的に活動した、ということのみである。そして、知られているの

は、例えば、彼が『最高善について De summo bono』といったテキストによって、つまり人文学部的な知の自律性を過度に強調したことにより、70年代の禁令の対象の中心的なひとりとなったということである。実際、彼のテキストの多くは、各学問分野が、それぞれいかに自律的原理を持って構成されるか、という一点に焦点をあてて描かれている。このことは、まさに今回取り上げる様態論を論じる書物でもかわりがない。もちろん、その背景にはアリストテレスの再導入に伴う、当時の学知の空間全体における、各分野での学問性の確立の要請があった。

今回は、彼のそうした、学知の再配置のプログラムの全体を再構成する余裕はないのだが、他の分野についても広く論じているダキアのポエティウスが、ここで文法学についてもやはり論じようとしたのは、まさにそうしたプログラムの一環としてであったことをとりあえず念頭におきつつ文法学が可能になる地平に関する彼の議論を追ってみたい。

## I ダキアのポエティウスの課題

私達はまず文法学の学知化への要請を歴史的背景のなかで外側から記述した。では、ダキアのポエティウス自身は、文法学を学知化する自分の試みをどのようにとらえていたのだろうか。当時の文法学の位置を、状況をどのようにとらえていたのであろうか。

彼はまず次のように言っている。

「論証的なかたち *modus demonstrativus* で学知を組み立てることが可能な事物においても、しばしば論証的な形ではなく、単に記述的なかたち *modus narrativus* でそれらが説かれてしまうことがあります。こうした教えは十分でないばかりか、学知を構成可能であることがらについて、学知よりもむしろ単なる見解といったものを創り出してしまうのです。そうしたわけで、プリスキアヌスが、文法学を、そこで可能な限りの学知の形態で教えることをしなかったゆえに、彼の教えは大きく損なわれたものになってしまいました。彼は多くの結論を述べながら、その原因を示すことを怠り、ただ専ら古えの文法学者達の権威によりかかって、それらを示したに過ぎないのです。ですから、彼は文法学を真の意味で教えたとはいえないのです。」<sup>3)</sup>

このように、彼は自らの議論を文法学の権威であるはずのプリスキアヌスへの不満

からはじめる。そして、このことは何よりも目指されるべき、たしかな学としての文法学が、未だ不在のものとしてしかダキアのポエティウスにとってはなかった、ということを示している。このことは、基本的にその分野の権威に依拠して展開された当時の知の形態において、文法学の分野における権威であるはずのプリスキアヌスへの強い不満から自らの学を始めているという点で重要である。つまり、この言明は、「文法学において、論証的な学知の構成形式は可能か?」という問題のなかで「プリスキアヌス、つまり文法学の権威は文法学を論証的な仕方では教えずにできなかったのか」という異論に対して提出されているのだが、それに対してダキアのポエティウスは「まさにそのとおり。プリスキアヌスに答はない。私達が、プリスキアヌスにはなかった形で文法学を基礎付けるのである」と答えているわけであり、彼の文法学の設立のプログラムとは、単なるプリスキアヌスの再受容といったものではありえなかったのである。

この学知としての、言語の理論としての文法学の不在は、しかし、単にプリスキアヌスが偶然に不徹底であったことにのみ起因するものではなく、ダキアのポエティウスの言語理論によれば、私達が日常接している言語の構造・実状にある程度起因する必然的なものである、という側面も持っている。というのも、現実には私達は、個別の言語にしか直面しない。個別のかたちで、さまざまに言語共同体によってことなっていて形成・所有された個々の言語にしか直接は接することができず、その次元においては言語は、慣習的に、恣意的に *secundum placitum* に言語共同体ごとに異なったかたちで設定されているので、附帯的な要素が主となり、学知の構成対象となるような唯一の本性を示さないのである。

そのような背景のうえで、彼は、どのような形で文法学が学知の対象となりうると考えたのだろうか? それを次に見て行きたい。

## II 三層の写し取りという解釈

ここで結論を先取りする形で、少々視点を現代に戻し、様態論が言語を他の存在者との関係で位置づける図式が、現在一般にどのように理解されているかを確認して、しかし、それがこうしたダキアのポエティウスの課題と微妙にずれてくることを確認したいとおもう。

現在の研究者たちによって、様態論学派は、言語の織り成す層を位置づける際に、

事物の形成する層、知性認識の形成する層、言語の形成する層の三層の写し取りという構図を用いている、とまとめられている<sup>4)</sup>。事物の成す層において成立する存在様態 *modus essendi* が知性認識され、認識様態 *modus intelligendi* となり、それが言語の層において表現され、表示様態 *modus significandi* を形作るのだ、と述べられる。この要約は、つまりは三層の間に、それぞれ順に様態が写し取られる一方通行の写像関係が成立するという図式である。

たしかに、ダキアのポエティウスを始め、様態論学派の人々は、こうした写像関係を基本的なアイデアとして述べてはいる。しかし、すぐに確認されるように、この図式、つまりアリストテレス『命題論』冒頭部で表明される図式の、当時一般的な解釈におそらくほぼのっとった図式は、ダキアのポエティウスらの文法学の学知化の企図にたいして、必ずしも十分にこたえてはくれないことが、『命題論』冒頭部に、この図式を送り返して確認してみれば明らかになるだろう。

確認しよう。『命題論』冒頭部<sup>5)</sup>では、どのようにいわれていたであろうか。それは、図1のように仮にまとめられるだろう。事物と知性の層との間では確かに同型性 *similitudines* がいわれているが、言語と知性との間の関係は *symbola* である、といわれ、*secundum placitum* なものだ、と規定されている。つまり、確かに3つのレベルの間の写像関係はいわれるのだが、最初の二者の間は、有縁な、自然本性的なつながりをもった関係であるが、実際の音声化や文字化された諸言語、各個別言語との間

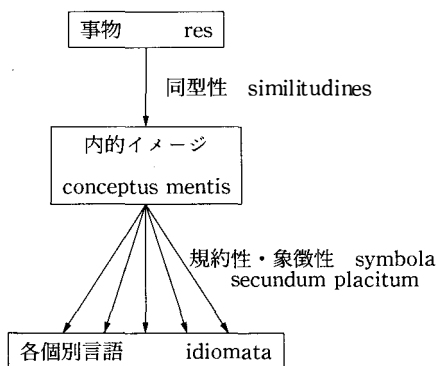


図1 アリストテレス『命題論』的構図

には、規約性が、つまり人間の恣意が介入するものとなる。そして結果として、個別の諸国語の形態へと、言語は分断されたものとして、単一の本性を持たないものとして位置づけられることになってしまう。

だから、もしこの図式によるならば、言語は諸国語を通して一貫した本質を持たないものとなり、学知の対象とはなりがたくなるがゆえに、ダキアのポエティウスは、この図式からずれなければ、彼の諸言語をつらぬく言語の本質を発見し、文法学を学知化するというプログラムは遂行できないと考えられる。そして実際、彼はそうした見当で議論を進めているように思われる。

それは、どのようにであろうか？ それは文法学が可能となる地平を確保するために、文法が固有の本性を持つことを可能にするために、二重の基礎付けを行うことによってである。それらを順を追って見ていきたい。

### III 二重の自然化

彼のプログラムは、第一に、各個別言語の多様性を、それらがどれも人間という種に固有なひとつの自然本性的な言語能力のあらわれであるとみなすことで、つまり、各言語共同体において個別に創出され、音声形態において（そして書字形態において）相互に異なってしまう言語から、そうした言語を開発し、使用する人間の能力の側に視線を移すことで単一の自然本性を持つものへと還元することにはじまる。第二に、そうして想定された言語能力に由来する単一なる言語の本性を、事物に由来するもの、と事物の本性の側からあらためて基礎付けるのである。

#### a 人間の言語能力の単一性という根拠

そのうち、まず第一の基礎付けを見てみたい。それは、人間の知性のレベルにおいて成立する単一の内的言語、そしてそこから慣習的、偶発的に音声化・文字化されて生じる複数の言語という、当時一般的だった視点から、おそらくややらずした視線で言語を構成するものである。

彼は次のように言う。

「人間は、他の自然的能力と同様に、言語能力 *locutio* あるいは、文法（の知）*grammatica* を自然本性的に有するのであって、それにより、内に抱いた概念を表現するのです。」<sup>6)</sup>

そして、そうした人間という種にとって自然本性的な能力として単一の言語能力を想定するならば、「仮に人間が産み出してきた、(それぞれに個別化された)すべての諸言語の音声的な形態と、表示様態が取り去られたとしたら、恐らく、そのとき人間は自然本性的に思考内容と感情を表現し、それはすべての人々において同様のかたちで行われることになるでしょう。なぜなら同じ自然本性に由来するものたちは、その本性を共有する限りで同じものであるからです。そして、その時には、現に私達が、苦痛や感情、あるいはそれに類した思考内容を(慣習によって定められたのではない自然的な)ある種の音声で表現しているように、表現のために自然に秩序付けられた音声を持つことになるかもしれません。だがしかし、すでに人間によって、諸国語が産み出され、様々な民族において多様化しているがゆえに、人間には、(それらを一貫した秩序を見出す)文法学 *grammatica* が必要なのです。他方、人間以外の動物たちは、自らの感情や思考を専ら自然本性に従って表現し、それゆえ技術的な知識 *ars* を必要としないというのに。」<sup>7)</sup>

なぜ、では人間では諸国語への多様化が生じてしまっているのでしょうか？

「人間は自然本性的に有しているもののうちのわずかをしか(現実には)手にしないのです。自然は人間を大変に不完全なままに放って置くのであり、人間は知恵なしでは、野獣のようにあるのです。」<sup>8)</sup>

つまり、権利上は、その自然本性の根源においては、人間においても、各動物がそれぞれの種に固有の言語を持つように、言語はひとつのものとしてであると想定されるのだが、だがしかし、ある種の欠損として諸国語への多様化がおきてしまっており、その欠如は、まさにこのダキアのポエティウスらの進める様態論学派的な文法学によって縁取られ埋められるべきものとして想定されるのである。

こうした、一方での言語能力の、人間という種への内在化によって諸国語を貫く単一の文法の可能性を確保し、他方で、その不在を様態論学派的な言語理論によって縫い合わされるものとして構成することで、現実確認される、諸国語として附帯的な音声形態を背負わされた複数言語の存在という事実と、様態論学派的なプログラムが可能となるような、諸言語を貫いた単一の言語の本性——だが、ただしいわゆる内的言語とは違った形で——が存在すると語りうる地平をつなぐ線を描いている<sup>9)</sup>。

## b 事物による文法の基礎付け

続いて、では、そのように確保される、諸言語を貫く文法とはいかなるものなのかを検討したい。

それは、様態論学派にとっては、基本的には、品詞 *partes orationis* の体系として分析される。そして、その品詞を形作るものである表示様態は、事物の存在様態に依拠しており、私達の恣意によるのではない、ということが強調される。

ダキアのポエティウスにおいて、どのようにひとつの語が構成されるかを見てみよう<sup>10)</sup>。

まず、普通の意味での語の全体は *dictio* と呼ばれる。そして、そのうち、意味を担っている部分が *significatum* 表示内容と呼ばれ、文法的な機能を表わす側面は品詞 *pars orationis* と呼ばれる（仮にこれを左右の分割とする）。次いで、別の方向にも分割され、それぞれ第一の分節、第二の分節、と呼ばれる（仮に上下への分割とする）。この分割は、彼の理論において重要な位置を占めているのだが、その役割はのちほど確認する。

まず、ダキアのポエティウスらが打ち立てようとする学知化された文法学の視点にとって重要であることは、語の構成要素の左右に分割された半分、つまり表示内容を捨象することである。

ダキアのポエティウスは次のように述べている。

「確かに、文法学者は、語および、それに内在する構成部分としての表示内容を考慮に入れています。だがしかし、ある特定の実在する事物が語の表示内容となることは、なんら必然的に生じるものではないのです。それは語にとって偶発的なことです。例えば、人間と言う事物が、*homo* という名詞の表示内容であるということは、この名詞に偶発的に生じることであります。実際のところ、たとえ、ある語が、その表示内容としてこれこれの事物といったものを全く有していなかったとしても、名詞という品詞は、その品詞としての種別性を保つでしょう。だから、文法学者は、語が必然的に有する表示内容を考慮には入れるにせよ、附帯的なものである、それを考察の対象とはしないのです。」<sup>11)</sup>

このように、表示内容を、厳密な意味での学としての文法学の対象から除外してい

る。これは、何よりも、諸国語において、ある事物にどのような音声に対応づけられるかが異なっていることから明らかのように、ある音声がある指示対象を示しているということは偶発的な事態であるからである。つまり、この次元では文法学を学知としてたてることを保証する諸言語を貫いてあるような同一の本性は見出されない。

しかし、音声は諸品詞の形態を取ってあること、品詞が存在することは諸国語を貫いて存在している。そのことを例えば彼は次のように言っている。

「品詞は、様々に異なった諸言語において、本質的には同じものなのであり、それは偶発的に異なっているだけなのです。例えばギリシャ語で *antropos* (原文 *ママ*) という名詞は、ラテン語でも、*homo* という名詞です。」<sup>12)</sup>

つまり、品詞の次元においてまさに、諸国語の多様性を超えた、学知としての文法学が固有の対象とする地平が存在しているということを、ここで彼は示している。

ダキアのポエティウスがあげている他の例を見てみよう。例えば、白い *albus*、という例を彼はあげているが<sup>13)</sup>、ラテン語では、むろん、たんに白いことは *albus* であらわされ、さらに比較級 *albior*、最上級 *albissimus* という形で、その白さの程度を示す表現がある。そして例えばドイツ語では *weiß*、*weißer*、*weissest* という形でやはり原級、比較級、最上級というかたちで程度を表現できる<sup>14)</sup>。

ここでまず確認されることは両言語で、原級、比較級、最上級はそれぞれ全く別の音声で表現形として実現されてはいるということである。実際、*albus* と *weiß* は一見したところその音声形態は全く異なっているし、*albissimus* と *weissest* も同様である。だが、その程度を表現する機構自体は、実在から受け取られたものであり同一のものであるとダキアのポエティウスはいう。つまり、それぞれの言語で指示する対象に割り当てられた音声は異なっているのだが、そうした音声の割り当てを規定する原級、比較級、最上級という構成は両者の言語で共通している。そして、それら三つの級は、存在の様態における通常の状態、より多くある状態、最も多くある状態という差異に由来すると彼は考える。その限りで表示様態は事象の世界に根差しており、逆にそれゆえに、言語は固有の一貫性を持つのである、と彼は結論づけるのである。

さらに、そのことを一般化された形で、彼自身の言葉に即して見るならば、彼はそれを、次のように語っている。

「実際、表示内容における違いをすべて取り除いてしまったとしても、依然とし



て、それぞれの品詞の区別は、文法家に対して十分に存在します。文法学の観点からすれば、表示内容 *significatum* と表示様態 *modus significandi* の両者において異なっている二つの品詞（例えば「走る」*currere* と「人間」*homo*）のほうが、ただもっぱら表示様態においてのみ異なっている品詞同士（例えば「苦痛」*dolor*、と「苦しむ」*doleo*）よりも、より区別されるわけではありません。文法学者は実在の事物を問題とするのではないのですから。」<sup>15)</sup>

だが、これだけでは、例えば、品詞の設定はやはり人間の意志によるのであるし、それゆえに、諸言語を貫く文法、文法学を想定するには無理が生じはしないのか？ たとえば品詞のシステムは言語によって違うのではないか？ という反論が可能だともおられる。そしてまた、たとえば「運動」という語は、名詞でありながら動くことという事象をあらわしており、その限りで「事物に由来する」という言い方はおかしいのではないか？ という反論が、なお提起されうるだろう<sup>16)</sup>。

だが、それに対して、ダキアのポエティウスは、「文法は純粋に私達の意図によってできているわけではありません」と答える。「事物のありかたと齟齬をきたすこと *repugnare* はできないのです」と答える。「というのは、言語の設定者は、事物の諸特性によって規制されているのであって、事物を表示するに際して、その事物の有する諸特性と相入れないような表示様態を用いることはできないからです。」<sup>17)</sup>

この見解は、先に語の構造において、後に検討することにしておいた二重の分節によって、具体化され保証され、それによって、そうした疑問に一定の答が与えられる。それを確認しよう。

#### IV 二重の分節

二重の分節とは、簡単に言えば、第一にある特定の音声がある事象に結び付けられ〔第一の分節〕、それが表示様態と結び付けられて品詞となる〔第二の分節〕ような二重化された分節である。

まず、音声は第一の分節以前には「拘束されておらずいかなる概念でも表示しえます」<sup>18)</sup>。いかなる音声でも、その指示の対象は *secundum placitum* に決定される、ということである。そして、まず第一の分節によって、ある音声に、ある表示内容が対応づけられる。これによって音声は「ある特定の表示内容へと制限されるのです」。

次いで、第二の分節として、その表示内容をいかなる形で表示するか、という表示様態が設定され、つまり、品詞の次元が確立されることになる。そして、この次元において、言語は存在の秩序に依拠しているとされるのである。

つまり、第一の分節においては、当時一般的な見解であった人間の自由な設定による言語の措定と言う枠組みが保存されているのだが、他方で、第二の分節には、ダキアのポエティウスが、内的言語においてではなく発話される諸言語においても、それらの間の差異を貫くかたちで、学知を可能とする対象の一貫性が存在すると主張しうる根拠とする言語の存在への依拠が存していると彼は主張するのである。言語が存在に依拠すると言う際に彼が主張しているのは、個々の語がその指示対象と有縁な関係を結んでいるということではなく、個々の語がある言語内で配分されカテゴリー分けされるそのシステムが各言語で一定の共通性を持っており、そしてそのシステムが存在の秩序に根拠を持っているということである。つまり、先に、原級・比較級・最上級に関してみたように、そして、例えば名詞が存在の固定した状態で対象を示し、動詞が対象を存在の生成の様態で示すように、存在の諸様態を写し取ったものとしてそれらの言語の様態はあるのだ、ということである。

これを前提にして、先ほどの異論「それでは運動、という名詞はどうか？」に戻ってみたい。

例えば、動くことをあらわすのに、「運動 motus」という名詞の形態と「動く moveri」という動詞の形態が考えられる。これに関して、「動く」はたしかに動くことをあらわしているが、運動という名詞は名詞である以上事物を静止した形態で示しているのであって、動くこと、という事物には由来しないものを示しているのではないか、これは、表示様態が事物に由来するという見解と矛盾するではないか、という異論が提出されていた<sup>19)</sup>わけだが、それに対して、ダキアのポエティウスは、図2に要約したように、いや、それはあくまでも表示内容の次元での話であって、文法学の考察対象に入らないものである。「運動」と「動く」は、文法学の対象である表示様態の次元においては、つまり品詞の次元においては、別の存在様態に由来をもつのであり、その限りで文法学が固有の対象とする言語の次元においては異なっている。だが、それぞれが有する名詞や動詞という表示様態の次元においてはやはりなお事象の次元に由来するということと言える、と答える。つまり、ここで、先に確認した「文法学者は表

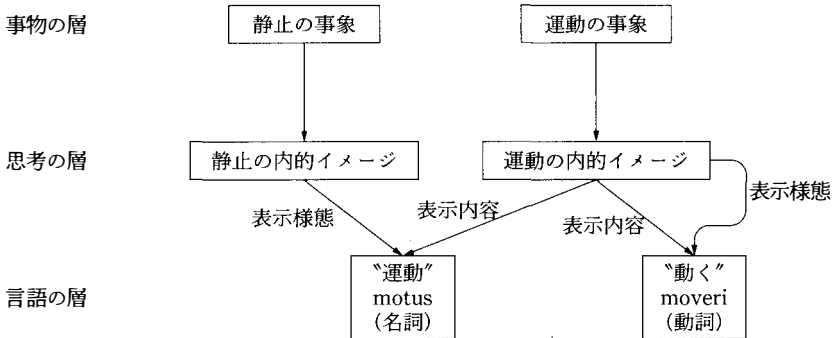


図2 表示形態と表示内容

示内容 significatum を考慮しない」という言明が、彼の理論においてもつ意味が確認され、文法学が可能となる次元が表示形態が形作る品詞の次元であることが具体的に述べられている。

さて図2であるが、そもそも、「motus」や「運動」、「moveri」や「動く」といったかたちで、事象「動くこと」を表示内容としてあらわす音声形態は諸言語によって異なっているものであり、その表示内容の次元で事象との一致した対応を考えることは困難である。逆に言えば、この次元では secundum placitum な、偶発的な対応付けが言語を形作っている。しかし、それが名詞や動詞としてある次元、表示形態の次元において、つまり第二の分節の層において諸言語を貫いた次元が成立しているのである。

つまり、このように二重の分節を介し、そして品詞が切り出される視点と、表示内容が切り出される視線を分離することによって、あるひとつの語の存在を構造化することを前提としたうえで、三層の写像関係の図式は語られているのである。

それゆえに、三層の間の写像関係は単純なものではない。しかし、言語固有の平面が、文法学によって明るみに出されるべき諸言語を横断した平面が存在することは、まさにそうした写像関係、言語における品詞のシステムが事物の諸特性に由来することによるのであり、その限りで、言語のシステムは、「文法は、純粋に私達の自由

なるものではない」のであり、同時に人間の自然本性的な能力としての言語能力 locutio に裏打ちされつつも、言語の本性が、学知としての文法学の対象として析出されるようなものとして、事物の本性と同じようなかたちで人間の自由になるものとは別なところに存することが保証されることになるのだと彼は様態論の基礎理論をしめくくるのである。

### おわりに

私達は、内的言語とは対照的に諸国語へと分化しており、つまり偶発的な原因しか有しているようにみえない具体的な諸言語が、それでもなお学知の対象となりうる一貫性を有していることを、ダキアのポエティウスが、人間の言語能力、そして存在の様態へと二重の基礎付けを通して確保する過程を確認した。

そして、そこにみられる存在の様態への言語の依拠は、単純な表示内容と語の対応関係ではなく、あくまでも品詞を形作る表示様態の次元における対応であることを確認した。この基本的な図式はやがて、14世紀半ばにオッカム派からの批判を受けることとなる<sup>20)</sup>のだが、それまでのしばしの間、半世紀強にわたり様態理論が展開してゆくことが可能となる地平を準備することになる。次は、その具体的な文法の詳細に近寄って記述をすることへ進まなければならないだろう。

### 注

- 1) 以下の引用はすべて corpus philosophorum danicorum Medii Aevi, vol. 4 pars I, Modi significandi sive quaestiones super priscianum maiorem, eds. J. Pinborg & H. Roos, 1969, København を原本とした私訳である。引用箇所は問番号、ページ数；行数で開始位置を示すものとする。なお、必ずしも同意できないことも多いが、部分訳が大野晃徳・八木雄二訳で中世思想原典集成 19 巻に収められている。
- 2) Jensen, S. Skovgaard, "On the national origin of the philosopher Boethius of Dacia" in: *Classica et Mediaevalia* XXIV, pp. 232-241.
- 3) Q. 9, p. 39; 24.
- 4) 例えば, Rosier, Irène, *La grammaire spéculative des Modistes*, 1983, Lille, Presses Universitaires de Lille.
- 5) 16a3-8. なお, ラテン訳はメルベケのギョームのものに拠った。
- 6) Q. 16, p. 61; 30.
- 7) Q. 5, p. 25; 111. なお, ここで表明されている見解は, 当時一般的だった人間の言語

の規定とかなりずれている。一般的に、人間の言語が動物達の鳴き声から区別されるのは、それが自然本性的な自動性から離れて、知性的に構成されているところに存するとされており、人間においても、苦痛の悲鳴などは分節化されていないがゆえに人間本来（固有）の言語活動からは区別されるべきものであると扱われるのが普通であった。その限りで、こうして人間という種の自然本性に、動物の鳴き声はその種の自然本性に依拠するというのと同様であるというかたちで基礎をおくダキアのポエティウスは、実は様態論学派のなかでも少々変わったものである。様態論学派の人々の間でも必ずしもこうした問題は見解が共有されているわけではない。ここで、ダキアのポエティウスを様態論学派前期の代表的人物として扱っているが、少なくとも様態理論の基礎理論に関しては、ダキアのポエティウスの見解は、他の同時代の論者達に比べ、微細な理論の帰結に注意を払ったものであるといえる。

- 8) Q. 5, p. 23; 70.
- 9) なお、こうした自然（科）学的な記述へと現象を還元する彼の方向性は、彼の夢の理論などにもはっきり見られるものである。cf. 関沢和泉「十三世紀の夢の理論——ダキアのポエティウスの場合」『砂袋』第7号（1999）pp. 140-163.
- 10) Q. 29, p. 88; 81 などの記述から構成した。
- 11) Q. 11, p. 48; 155.
- 12) Q. 2, p. 14; 72. ここで、注意しておきたいことは、antropos と homo において、その指示対象であるニンゲンが同じものであると語られているのではなく、このギリシャ語とラテン語の両者において、それが同じ名詞という品詞の形態を取って表現されているということこそが、諸言語を横断する次元の存在を意味しているということである。
- 13) Q. 29, p. 88; 79.
- 14) 残念ながらドイツ語の例はダキアのポエティウス自身によるものではない。ギリシャ語、ラテン語以外の言語はダキアのポエティウスにおいては参照されていない。
- 15) Q. 14, p. 55; 39. なお、括弧のなかの例は引用の前後に出てくる例から筆者がおぎなったものである。
- 16) Q. 20, p. 71; 5.
- 17) Q. 5, p. 24; 104.
- 18) この個所、及び次の引用は Q. 114, p. 262; 83 からのパラグラフによる。
- 19) Q. 20, p. 71; 5.
- 20) Kaczmarek, L. (Hrsg.), *Destructiones modorum significandi*, 1994, B. R. Grüner, Amsterdam/Philadelphia.